ある女性の波乱の生涯

１．友人の母の死

つい先日ベオグラード在住で一時帰省中の友人、山崎洋さん（父親の姓に因んでペンネームを「武家利一」と称している）から思いがけない電話を受けた。去る５月３日、母上が静かに息を引き取ったとわざわざ知らせてくれたのだった。享年９２歳だった。母上はお年にめげず行動的で、大変意思の強い方だった。息子家族の住む、遠く離れた旧ユーゴスラヴィアの政治情勢と治安をしきりに気にかけておられ、旧ユーゴ紛争中には混乱の機に乗じて介入しようとする、アメリカやＮＡＴＯの動きに強く反対しておられた。2000 年激化するコソヴォ紛争時にいただいた年賀状には、「昨年前半はＮＡＴＯの理不尽なユーゴ空爆反対運動に明け暮れました」と書かれ、短い言葉の中に不条理な他国の干渉に対する抗議と、母上としての不屈の信念と示威的な行動を滲ませておられた。苦難の人生を歩まれた山崎さん母子に対する格別の思いもあって、友人の心中を察すると気の毒で、なんと言って慰めてあげたらよいのか言葉もなかった。悲しく切ない思いにも捉われた。早速敬愛する作家小中陽太郎氏にもお知らせした。小中氏がかつて日本ペンクラブの代表として旧ユーゴスラヴィアを訪れたとき、通訳として協力してくれたのも山崎洋さんだった。折り返し小中氏から「激動の一生でした。主の祝福が豊かにありますように。篠田（映画監督の正浩氏）と話したところでした。洋さんによろしく」と温かい気持ちを包んだメールをいただいた。

友人の母上は、裕福な家庭に生まれ津田塾で英語を学びながら、リヒャルト・ゾルゲの同志としてゾルゲ事件に連座して収監されたクロアチア人ジャーナリスト、故ブランコ・ド・ブーケリッチ氏と恋に陥り結ばれるという、近代女性史上においても稀に見るドラマティックで波乱の一生を終えた女性、山崎淑子さんその人だったのである。近年横浜市内で近所に住む親戚や親しい人たちと細々と交流しながら 1 人暮らしを続けておられた。ブーケリッチ氏との間のひとり息子、山崎洋さんは 1963 年（昭和 38 年）大学を卒業すると母を残し、父の母国だった旧ユーゴスラビアへひとり旅立って行った。以来山崎さんは国家が分裂してセルビア・モンテネグロと国名が変わった今日まで、半世紀近くに亘り同国に生活の基盤を置き、首都ベオグラードで家族ともども、日本との社会・文化交流のために活動を続けている。

註、去る５月 22 日に実施されたモンテネグロ共和国独立の是非を問う国民投票で、独立支持派の得票率は 55.5％で、独立に必要な 55％を上回り、独立とセルビア共和国との国家連合解消が決まった。

２．映画「スパイ・ゾルゲ」の舞台裏

３年前の夏、映画「スパイ・ゾルゲ」（篠田正浩監督）が公開された。篠田監督にとって最後の作品として心血を注いだフィルムは、下馬評通り世間の注目を集めた。製作にあたって横浜の山崎さんの自宅を訪れた篠田監督は、母上から手紙や日記を見せてもらい、プライベートで生々しい秘話に熱心に耳を傾けたという。公開に先立ち母子で試写会に招かれた山崎さんは、内戦の爪あとも残るベオグラードからひとり実家へ戻ってきた。母上とともに実写を見た山崎さんは、その数日後に会ったとき、私にふたつの点で意外だったと語ってくれた。そのひとつは、映画の中で生後間もない自分自身に対面したことで、まさか自分が映画に出てくるとは思いも寄らなかったと笑いながら話してくれた。もうひとつは、脚本の描写に友人が若干疑問を感じたことだった。実は、冒頭の小中氏と篠田監督のメールのやりとりにその疑問の伏線がある。それは母上が初めて能楽堂でブーケリッチ氏に会った時に着ていた衣装のことだった。母上役を演じた女優「小雪」さんは素敵な女性で、しとやかではあるが内面的に意志の強い、昔の日本女性を見事に演じていたと思う。映画では母上は和服をお召しになり、休憩時間にその美しい和服姿の母上に目を惹かれたブーケリッチ氏が、話しかけたという設定になっていた。しかし、「あの時代は、洋装の日本人女性が珍しく、あの場でも母は人目につく、当時にしては珍しい洋装だった。その洋装姿の母に父の気持ちは反って惹かれていったように思う」と山崎さんは淡々と語ってくれた。しばらくしてその話を私は小中氏にも伝え、山崎さんが帰省中の昨年秋、小中氏を交え私たち３人が横浜で会ったとき、彼は小中氏との話の合間にその件についてさらっと触れた。

母上ご逝去の報をお知らせした２日後に、小中氏から再びメールをいただいた。

「篠田にこういった。『母上によると能楽堂で洋装が珍しかったからブーケリッチが惚れた。なのに洋服になっていない』と。すると篠田は『あれは衣装担当の森英恵がここはそうでも和服にしましょうと云ったんだ』と。『小雪だからね』とぼく。彼も気にしていたとわかっておもしろかった。ロシア正教の葬儀の音楽が聞こえるよ」

山崎さんは葬儀を済ませると当面必要な手続きを終え、この夏再び帰って来ると言い残し、家族の待つベオグラードへ帰って行った。

３．父の母国で活動する友人

山崎さんとは同じ大学の同級生である。しかし、在学中はお互いにまったく知らなかった。山崎さんと親しくなったのは、いまから 22 年前旧文部省教員海外派遣団にお伴して旧ユーゴスラビアを訪れ、彼に通訳をお願いしたときからだ。彼は単に言葉の変換だけではなく、深く思想、歴史、文化を読みながら的確な言葉を選んでよどみなく、しかも分かりやすく解説してくれる。通訳の域を超越して、まるで社会科学者の講義を聞いているよう

だった。それでいて、出しゃばるようなことはなく、通訳者としての立場もわきまえ、落ち着いていて控え目で、真摯な人柄と豊かな教養が滲み出るものだった。このときの同行者からは抜群に高い評価をいただいた、まさにＭＶＰものだった。訪問の成果が上がった大きな理由のひとつは、間違いなく友人のテキパキとした、その通訳ぶりに負っている。

旅行中のある夕べ、私たちふたりが肝胆相照らしてともにホテルのバーで一杯やっていたとき、山崎さんは私の顔をしげしげと見つめながら、どこかで私を見たことがあると言い出した。改めて自己紹介をしてみると、なんと彼とは同じ慶応義塾大学経済学部を一緒に卒業した同級生だったと分かった。しかも同じ社会政策関係のゼミを専攻して、何度か授業も一緒に受けていた。卒業して 20 余年、しかもまだ社会主義体制が堅持されていて、日本人もあまり訪れない時代の社会主義の国で同級生に出くわし、仕事のパートナーとして助けてもらうとは、そのあまりの運命の綾と偶然の妙にただ驚くばかりだった。確かに山崎さんの流暢な通訳ぶりは、それまでお世話になった通訳者とはかけ離れていた。ある時日本ペンクラブの例会で、かつて名優だった故小沢栄太郎氏の優子夫人にお会いしたとき、夫人は生前旧ユーゴスラヴィアを旅行された際、通訳としてお世話になった山崎さんの人柄とその通訳ぶりを小沢氏もべた褒めだったと話しておられた。

私はそのとき初めて、山崎さんがあのゾルゲ事件に関係した、ブーケリッチ氏のかけがえのない忘れ形見であることを知ることになった。学生時代にお互いに同系統のゼミを専攻して、同じように社会主義に関心を持ち、成長過程と生活環境は違いこそすれ、遥か母国を離れた社会主義の国で、お互いが偶然めぐり合ったのも天が差配した運命ではないかと思った。以来山崎さんが帰省のたびに年に一度は会って、彼と親しい交流を続け、今では私たちは深い友情に結ばれている。そんなことから私は度々母上とも電話でお話をするようになり、彼の大学時代の恩師の思い出や、夫ブーケリッチ氏のプライベートなことまでお聞かせいただいた。

４．自立心の強い、凛とした女性

ありがたいことに母上は私に対して、ためらうことなく貴重な話をして下さった。①母上のご兄弟が慶応の柔道部で活躍されたこと、②津田塾を出ると得意の語学を活かし、旧三井物産に勤めたキャリアウーマンのはしりであったこと、③夫ブーケリッチ氏は収監されるとき、妻の身の上と行く末を神経質なほど案じていたこと、④夫を尊敬し、信頼しあって、獄中から受け取った愛の手紙を大切に保存して、死後もその手紙と一緒に葬られたいと願っていること、⑤ブーケリッチ氏は獄中から「私の可愛い息子」と山崎さんのことを心配してしきりに気にかけていたこと、⑥昭和20年３月夫の獄中病死の通知を受けた時、苦難しながらも長途網走へ迎えに行ったが、思いもかけず「座棺」のままの夫に対面して涙が止まらなかったこと、⑦もう半年でも長生きしてくれたら終戦を迎え、家族揃って自由な生活を送れたはずだと残念そうに仰ったこと、⑧ミロシェビッチ元大統領に対する国

際的な非難についても、一方的なアメリカの言い分に対して冷静な対応を求めていたこと、⑨戦後旧ソ連で名誉回復したゾルゲと同じように自分たちも母子でソ連政府から招待され、歓迎されたこと、⑩大学時代の同人誌に私が寄稿した山崎さんに関する内容が褒め過ぎだと謙虚に仰っておられたこと、等々深い愛情と強い信念に満ちた話をいくつも伺い、そのひとつひとつが忘れがたく強く印象に残っている。

戦争に翻弄されたとは言え、ひとりの人間、ひとりの女性に降りかかった人生の試練としては、あまりにも苛酷である。波乱万丈の生涯を送られつつも、その中で妥協することなく自立心を持って強く生きた母上の、終始一貫毅然とした言動に対して、頭の下がる思いである。ひとりの女性として逞しく自立した母上が、ともすれば翻弄されがちな自分の破天荒な運命や社会的な試練にも決して臆することなく、戦後の厳しい生活環境の中にあって女手ひとつで一人息子を立派に育て上げ、その息子が学窓を出るや息子の意思を汲み取り、夫の母国へ旅立たせた凛とした母親の姿には、感動と賞賛を通り越して尊敬の念すら憶える。

心残りだったのは、一度横浜のお宅をお伺いして山崎さんの学生時代の思い出話でもお伺いしながら、苦難の生涯の一端でも直にお話いただければと思っていたが、今更老醜を晒したくないとやんわりお断りされ、直接お会い出来なかったことである。私が一方的に電話しても息子の友人として喜んでお話してくれた。近年必ずしも体調は万全ではなかったと伺っていたが、戦後六〇数年経ってようやく愛おしい夫のもとへ旅立つことが出来たことは、以って瞑すべしとでも言ったらよいであろうか。山崎淑子さんが天国で愛するブランコ・ド・ブーケリッチ氏と再会されることを信じ、友人山崎洋さんのご家族にもとこしえに幸せが続くよう心よりお祈りするばかりである。

合掌